日本行動計量学会
計量学会会報
第35号
1984年11月8日
日本行動計量学会
運営委員会広報係
（〒106）東京都港区
南麻布4－6－7
統計数理研究所内

様々の課題と変容

丸山久美子

昨年の夏から六カ月間、国際交流基金の海外派遣研究者として米国のイリノイ大学の社会心理学研究室でアメリカ人の家族観、死生観などの生活態度基底構造にまつわる諸般の研究を行ってきた。イリノイ大学といえば一九六〇年代頃、オスグッド、タッカー、クロンバック、ハンフレイズなどの有数の心理測定法関係の大御所が活躍した大学であると人から出発前に強く印象づけられていた。それから二〇年経って訪れたイリノイ大学の計量心理学のスタッフはかなり面変りしていたが、タッカーやハンフレイズは高齢をおして授業を持ち、学生達の人気も上々で意気さかんであった。だが、現象に関する計量的分析はひところほどには盛んではなく、認知科学という総合的な現象分析の流れが最先端を行っており、認知論的に事象をとらえようとする傾向がきわ立ち、そうした科学的アプローチについての議論が沸騰するという具合であった。計算機が急速に発達した一九六〇年から二〇年の間、確かに多次元解析に明けくれる風潮がことにデータ解析の分野では甚だしかったのだが、現在ではどうやら、それも頭打ちの感じで分析技法の詳細な工夫や考案も底をつきかけ、現象に関する認知論的分析に人々の興味が移行したものと思われた。

行動計量学会も年を重ねるにしたがって、時代の趨勢と共に様変りの様相を呈しはじめているかにみえる。初期の眼目は学際的研究の体系化を志し、計量的分析技法を共通の柱として様々の分野から新進気鋭の若手研究者が集結してこの課題と真剣に取んだが、当時の風潮からいつの間にか多変量解析法の研究に終始した感をまぬがれなかった。そのため、マクロ的な視点から学際的研究の体系化を試みるという目的がなおざりにされ、ミクロ的分析技法だけが先行した。学会員の数も千名前後の歩留りでそれ以上の枠を越えることが出来ないまま、行動計量学の当初の順風満帆の出発も今は風も吹かず、帆をたれたままの停滞が人々の志気を奪っているかにみえた。この辺で何かが起ってもよさそうである。自然に風が吹くのを待つべきなのか、人工的に風を作るべきなのか、ふたつにひとつの選択しかないとすれば、そのどちらを選んで進むのが妥当なのだろう。いずれにしても、常に何かを考えて先に進もうと努力することが必要である。

行動計量学が新しく飛躍するとすれば原点にかえってその本質をみなおし、そこで視点を変えて取り組む外にない。たとえば、ユークリッド空間での議論をリーマン空間におきかえて議論をするがごときである。これは言葉でいうほど生やさしいものではない。従来使い慣れたものを手から放し、全く異質のものを手にしてそれに慣れるまでには膨大な時日を要する上に、発想の転換をはかるための気風や土壌のようなものがそこら中に充溢して、それを完遂しうる偉大な頭脳がおいそれと出現するものとも思えない。人はとかく日常の事々に慣れ睦んで安逸をむさぼる傾向を強く有するがためである。常に変容する様々の現象の中にそれを敏くとらえうる偉大な精神の目ざめが今こそ必要なのではないかと思うのだ。ある日唐突に風が吹いて大海原に波がたつ時、たとえ、前方に嵐の予兆はあってもその間に多くの蓄積があり、目ざめた精神の躍動が期待されるのであれば、行動計量学会の発展に大きく貢献しうるからである。

（日本行動計量学会理事
盛岡大学教授）

第十二回大会報告

実行委員長・穐山貞登

第十二回日本行動計量学会大会は、十月四・五・六日の三日にわたって、東京工業大学にて開くことができました。

今回の大会は、他のさまざまな学会の大会日時が前後に接近し、多くの方々に格別のご面倒をおかけしました。一人の研究者が四から七の学会に所属しているような現状は、今日の研究活動の特色を表してもいますが、こうした勢いに気圧されないで、大会を有意義なものにするよう努力いたしました。異質な研究が出会うと、互いにとまどいを起こすでしょうが、互いにトレラントであることも生じているはずで、出会いの成果は厳しさと大らかさとが融け込んでいるところに期待されます。

一般テーマのセッションの座長を最初と最後の発表者にお願いしましたことは、突然でご迷惑をおかけしました。入会されたばかりのお若い会員に当っていただいたこともありました。これも勢いと、ご容赦をお願いしますとともにご協力にお礼申しあげます。二つのシンポジウム「効用理論とその周辺」「行動調査の方法」は、実行委員会から計画者へ、計画者からスピーカーへと、話題を順次に具体化する流れを信じ、応諾いただいた方々のお蔭で、内容の豊かなものにすることができました。

目ざましい特色をもった大会を開くというよりも、参加者の人数の見込みは正しかったろうか、受付などの事務にまちがいは起こらないだろうか、出費の計算に手落ちはないだろうか、というようなことが気になった大会の三日間でしたが、大過なく終了しました。参加者の皆様に、大会を盛り立てていただいたことを、実行委員会としてお礼申上げ、会員として学会の発展を喜びたいと思います。

この紙上で大会のご報告をいたしますが、ただいまの時点で、大会には参加されず発表論文抄録集の購入をご予約いただいた方々へ郵送する仕事が残っています。仕事の時間を調整して数人が当りますので、もうしばらく猶予をお許しください。

実行委員会

東京工業大学心理学研究室の穐山貞登を委員長として、同児玉好信が事務処理の中心となり、学部の学生、大学院生を含め二十八名で構成しました。心理学研究室は制度の上では、工学部人文社会群と大学院の社会工学専攻とに属していますので、実行委員会は社会工学専攻会議を通じて、各教官の協力を得、会員である熊田禎宣、今野浩、原科幸彦、木谷忍、額田順二、林理が加わっています。学部の学生は社会工学科、大学院生は社会工学専攻に所属し、アルバイトばかりでなく、大会参加を志した気鋭の者です。

大会参加者

正会員一四三名、準会員一四名、非会員（招待者を含む）一六名、賛助会員一名、以上一七四名に実行委員二八名を加え、合計二〇二名でした。

個人発表件数

個人発表の総数は五五件でした。六、七件ずつ九セッションに分け並行するのは二か三のセッションにとどめる日程でした。なお、プログラムでは五四件でしたが、期限を思いちがいされた方があって論文抄録集には一件追加してあります。

懇親会と参加者談話室

懇親会費の計上には、実行委員会として頭をいためました。懇親会のあり方を考えるのはもちろんですが、発表討論会のあり方とも関係するのですから、機会を設ける努力はいたしました。受付や会場の係をつとめた学生たちや、机や機材を運んだ学生たちには、確かに、リラックスして大会参加を実感する機会であったのです。幸い五三名でにぎやかに時を過ごしました。談話室は、控室でもあり、コーナーに書籍の展示もいたしましたが、セッションから抜け出した人だけが利用するのではなくて、談話時間を日程に取り入れればよかったと悔んでいます。

その他

大会賛助金、広告などは考えませんでした。是非は一概に決まりませんが、明年度大会の成功に新たな手立てがあることを祈っております。

（十月十九日）

会議議事録

○理事会

時　昭和五十九年九月十七日
所　統計数理研究所
出席者　理事十四名・監事一名

1、水野理事より新会則案、役員選出に関する細則案、選挙管理委員会規定案の説明があり、審議の結果、第十二回総会に理事会案として提出、採決を求めることに決定した。

2、日本学術会議会員の選出方法の改正にともない、本学会も学術会議会員推薦管理会に登録を申請することとし、所属を希望する関連研究連絡委員会の第一順位を第一部行動科学に、第二順位を第四部統計学にすることを決定した。

3、二つの学会賞の設定を第十二回総会に提案し、採決を求めることになった。

4、河口理事より、北大で開催の第十三回大会日程を総会までに決定する旨報告があった。

○理事会

時　昭和五十九年十月四日
所　東京工業大学
出席者　理事　九名

1、第十二回総会で新会則が可決されたことにともない、年内に役員選挙を行うことになった。選挙管理委員会規程にしたがって、選挙管理委員長に豊川裕之氏を、委員に杉戸清樹、中村隆両氏を推薦することとした。

2、総会で学会賞設定が可決されたことにともない、学会賞問題検討委員会を設置することとし、飽戸、駒澤、水野理事および江川清氏に委員を依頼することになった。

3、事務局より、九月二十八日、本学会の日本学術会議会員推薦管理会への登録申請をすませた旨報告があった。

学術会議との対応を円滑にするために日本学術会議担当理事として水野理事があたることとなった。

4、一九八六年第十四回大会の開催候補地を次回理事会までに提案することとした。

○第十二回大会総会（十月四日）
於　東京工業大学中棟三号館
［挨拶］開催校（熊田禎宣社会工学科教授）
学会（林知己夫理事長）
［報告および議事］（議長・今野浩大会実行委員）

1、昭和五十八年度事業報告、同決算報告（林理事長ほか各担当理事）

2、会計監査報告（開原監事）

3、会則の改正（野元理事より提案説明があり原案どおり可決）

学会賞の設定（水野理事より内容の説明があり原案どおり可決）

4、昭和五十九年度事業計画・同予算案（原案どおり承認）

［次回開催校挨拶］（河口至商北海道大学工学部教授）

［実行委挨拶］（亀山貞登委員長）

○運営委員会

時　昭和五十九年十月五日
所　東京工業大学
出席者　運営委員　十三名
庶務担当理事　一名

1、今後一年の計画方針についてこれまでの方針を引続き実行していくこと、および、月例シンポジウムの強化と、サマーセミナーの実施を確認した。

2、月例シンポジウムについて

①金児氏（大阪市大）をオーガナイザーとする「宗教意識の計量学的研究」を、関西地区において十二月一日（土）、第38回月例シンポジウムと第6回行動計量関西懇話会との共催で開く旨が辻本関西担当委員より報告され、了承された。

②柳原氏（株・マーケティングサービス）をオーガナイザーとする「都市と人間生活」を、統数研において十二月六日（木）、第39回月例シンポジウムとして開催することが報告され、了承された。

3、サマーセミナーについて

本年八月の富士研修所におけるサマーセミナーの実施および会計報告が中村委員よりなされ、承認された。

ついで、来年の夏に、今年と同様サマーセミナーを実施することを企画することとし、北海道で大会の前後に行うことについて検討した。

会員数（59・10・25現在）

正会員	一〇〇一名
準会員	一一〇名
賛助会員	三九社

昭和58年度　会　計　決　算

昭和 58 年 4 月 1 日～昭和 59 年 3 月 31 日

収　　入	決　　算	予　　算	増　　減
前年度繰越金	2,991,374円	2,991,374円	0円
学術定期刊行物補助金	770,000	770,000	0
58年度学会費	5,536,000	5,520,000	16,000
（正会員　806名）	（3,992,500）	（4,000,000）	（△ 7,500）
（準会員　81名）	（283,500）	（350,000）	（△ 66,500）
（賛助会員　42口）	（1,260,000）	（1,170,000）	（90,000）
他年度学会費	624,000	700,000	△ 76,000
学会誌売上金	429,760	400,000	29,760
大会講習会決算残高	105,090		105,090
（15回講習会）	（5,650）		
（医学生のための行動計量学）	（59,000）		
（11回大会）	（40,440）		
抄録集等収入	57,000		57,000
預金利子	69,277	100,000	△ 30,723
計	10,582,501円	10,481,374円	101,127円

支　　出	決　　算	予　　算	増　　減
学会誌製作費	4,994,950円	5,328,600円	△ 333,650円
（和文誌10巻2号）	（983,000）	（900,000）	（83,000）
（〃　11巻1号）	（928,450）	（900,000）	（28,450）
（〃　11巻2号）	（684,500）	（900,000）	（△ 215,500）
（欧文誌 №14）	（999,000）	（1,314,300）	（△ 315,300）
（〃　№15）	（1,400,000）	（1,314,300）	（85,700）
月例会費用	86,470	100,000	△ 13,530
各種委員会活動	270,000	250,000	20,000
学会事務委託費	1,292,387	1,260,000	32,387
（管理費）	（120,000）	（120,000）	（0）
（発送手数料）	（864,577）	（832,700）	（31,877）
（漢字処理加算費用）	（110,970）	（93,000）	（17,970）
（新入会員・異動処理）	（168,050）	（176,000）	（△ 7,950）
（その他）	（28,790）	（38,300）	（△ 9,510）
人件費	30,000	60,000	△ 30,000
印刷費	232,400	300,000	△ 67,600
通信費	817,250	750,000	67,250
消耗品費	4,460	40,000	△ 35,540
交通費	0	10,000	△ 10,000
会合費	92,720	150,000	△ 57,280
雑費	39,140	50,000	△ 10,860
選挙費用	76,800	76,800	0
名簿作成費	816,640	757,700	58,940
積立金	1,200,000	1,200,000	0
予備費	0	148,274	△ 148,274
次年度繰越金	629,284		629,284
計	10,582,501円	10,481,374円	101,127円

昭和59年度　予　算

収　入	59年度予算	58年度実績	備　考
前年度繰越金	629,284円	2,991,374円	
積立金	1,200,000	0	
59年度学会費	5,365,000	5,536,000	
正会員 5,000円×800名	4,000,000	3,992,500	
準会員 3,500円× 90名	315,000	283,500	
賛助会員 30,000円× 35口	1,050,000	1,260,000	
他年度学会費	650,000	624,000	
学会誌売上金	600,000	429,760	
預金利子	130,000	69,270	
計	8,574,284円		

支　出	59年度予算	58年度実績	備　考
学会誌製作費	4,528,600円	4,994,950円	
和文誌12巻1号	950,000	10巻2号, 11巻1, 2号 計2,595,950	
〃 12巻2号	950,000		
欧文誌 No.16	1,314,300	No.14, 15 計2,399,000	
〃 No.17	1,314,300		
月例会費用	120,000	86,470	
各種委員会活動	320,000 (注1)	270,000	(注1) 社会調査技法研究会50,000円 刊行物委員会20,000円を含む
学会事務委託費 (注2)	1,474,400	1,292,387	(注2) (財)日本学会事務センターへの委託費
管理費	120,000	120,000	
発送手数料	1,008,400 (注3)	864,577	(注3) 1,200名，年8回発送，多点発送物手数料を含む
漢字処理加算費用	100,000 (注4)	110,970	(注4) 1,200名年8回発送
新入会員・異動処理	206,000 (注5)	168,050	(注5) 新入会員70名，異動250名
その他	40,000 (注6)	28,790	(注6) 事務連絡費，コピー代，リスト打出し料等
人件費	60,000	30,000	
印刷費	300,000	232,400	
通信費 (注7)	900,000	817,250	(注7) 日本学会事務センターにおける郵税含む
消耗品費	10,000	4,460	
交通費	10,000	0	
会合費	150,000	92,720	
雑費	70,000	39,140	
予備費	631,284		
計	8,574,284円		

新会則が発効しました
主要改正点と解説

第十二回総会で理事会提案の会則案が原案通り可決され、昭和五十九年十月四日から効力を発することになりました。

主な改正点は以下の通りです。

――・――

(1)本会の**所在地**を東京都内としたこと。

▼日常的な事務の遂行は、通常東京在住の会員が担当せざるを得ず、学会の事務機能が存在するという意味でこのように改めました。

(2)**準会員**を、学部及び大学院修士課程に在学する学生あるいはこれらに相当する者としたこと。

▼十月四日以降、**博士課程在学中の会員は正会員あつかい**となります。若手研究者の学会活動への参加がおおいに期待されます。移行措置は下欄を参照してください。

(3)**名誉会員制**を設けたこと。

▼行動計量学の発展に功労があり、理事会が推薦し、総会の承認を得た会員は、名誉会員としてその功績をたたえられます。

(4)会費を二年以上**滞納**した者は、理事会において**退会**したものとみなすことができる、としたこと。

▼従来滞納期間が示されていなかったので明確にしました。

(5)**役員の任期**を三年間と定め、再選をさまたげないとし、理事長だけは三期連続してその職につくことはできない、としたこと。

▼従来のように任期が二年だと総会開催時期との関係で実質的任期が二年を下まわり任務を十分に果たせなかったことを省みて三年と延長しました。

理事長は六年まで連続してつとめることができます。ただし現理事の任期は昭和六十年三月三十一日に満了することとしました。

(5)で述べてあることは来年の四月一日を起点として適用されそれ以前にはさかのぼりません。したがって過去の資格は白紙還元となり、あらたに適用が始まることになります。

――・――

なお、新会則と選挙細則とは別に印刷し、会員各位のお手元に届くようにいたします。

学会賞について

次の二つの賞が設定されることになりました。一九八五年に発足し、一九八六年から授賞を開始する予定です。

(1)日本行動計量学会
研究奨励賞（仮称）

四十歳未満の研究者で、ここ数年の間に、単数または複数の優れた研究業績を発表した個人または集団を対象とする。原則として毎年一～二件を選考委員会が選定し、理事会の承認を経て、受賞者を決定する。受賞者は、総会において表彰され、副賞として一件五万円が授与される。

(2)日本行動計量学会
学会賞（仮称）

優れた業績によって行動計量学の発展に著しく寄与したものを対象とする。原則として毎年一名を選考委員会が選定し、理事会の承認を経て、受賞者を決定する。受賞者は総会において表彰され、十万円の副賞が授与される。

――・――

なお、学会賞制度の具体化のため、学会賞問題検討委員会（飽戸弘、駒澤勉、水野欽司、江川清委員）が発足し、副賞のための基金作りの方法等について検討することになりました。

★博士課程在学中の会員各位
正会員へ移行手続のお願い

新会則により、本年十月四日以降、大学院博士課程在学者は正会員あつかいになります。十月四日以前に博士課程で準会員であった方は、日本学会事務センター日本行動計量学会係（〒113文京区弥生二―四―一六学会事務センタービル内）に、ハガキで、正会員になった旨を御連絡ください。すでに会費を納めた方は、追加分千五百円を納入いただければ幸いです。

第十三回大会の日程決まる

所　北海道大学
時　九月二、三、四の三日間

――・――

昭和六十年度の第十三回大会は右の通り、北海道大学で開催することが決まりました。大会期間は九月二日（月）から四日（水）の三日間です。河口至商理事（北大工学部情報工学科）を中心に開催準備が始まりました。会員諸氏の多数の参加を期待します。

国際会議論文募集のお知らせ

左記の国際会議が予定されており、論文が募集中です。

1、会議名　The 1st Congress of the International Fuzzy Systems Association

2、主催者　国際ファジイシステム学会（IFSA）

3、期日　一九八五年七月一日～六日

4、所　スペイン・マジョルカ島

5、論文締切　一九八五年一月一日

詳細の問合せは、

〒227横浜市緑区長津田町四二五九
東京工業大学・大学院総合理工学研究科　菅野道夫氏まで。

★学会への寄贈図書について

左記の研究刊行物が学会あてに寄贈されています。

○「大学入試センター・研究紀要No.7、8、9、10」大学入試センターより

○「大学入試研究の動向第2号」国立大学入学者選抜研究連絡協議会より

○「上智大学心理学年報・第8巻」上智大学より

○「マーケティング・リサーチャーNo.31、32」日本マーケティング・リサーチ協会より

○「鉄道労働科学・37」日本国有鉄道・鉄道労働科学研究所より

○「法とコンピュータ No.1」法とコンピュータ学会より

これらは当学会事務局（大学入試センター内岩坪氏）に保管されています。

月例シンポジウムをふりかえって

当学会の「月例シンポジウム」は、昭和四十八年以降、毎年二回～五回ずつ開かれ、来年は第40回を迎えます。これを機会に、これまでのシンポジウム・テーマをふりかえってみます。氏名はオーガナイザーです（第28回までは『会報23号』に一覧があります）。

第29回「薬と行動計量」（梶谷文彦・井上通敏　81・11　大阪大医学部病院）

第30回「調査データの信頼性」（柳原良造　82・4　統数研）

第31回「ディスプレイによる統計的解析」（駒澤勉　82・8　統数研）

第32回「日本の女性の生き方――世論調査データの分析から」（杉山明子　83・6　NHK放送博物館）

第33回「ファジイ集合とその応用」（浅居喜代治　83・6　大阪市立大）

第34回「言語行動の計量的研究」（江川清　83・11　国語研）

第35回「多次元定性データの解析」（田中豊　83・12　大阪市立大）

第36回「多次元尺度法（MDS）の最近の動向」（高根芳雄　84・6　統数研）

第37回「政治の計量モデル」（三宅一郎　84・6　京都会館）

第38回「宗教意識の計量学的研究」（金児暁嗣　84・12　予定）

第39回「都市と人間生活」（柳原良造　84・12　予定）

月例シンポジウムのテーマは運営委員会で随時協議されています。これまでに御専攻の分野のテーマで開催されていないなど、御希望御意見がありましたらどうぞお寄せください。

また、今夏から新しく開かれたサマーセミナー（今夏第一回のテーマは「行動の計量と予測」でした）についても、テーマなどの御意見をお寄せください。

学会誌バックナンバー購入のご案内

ご希望の巻・号名、冊数、および送付先・氏名を明記し、代金と送料を左記あてに郵便振替でお送り下さい。

◇請求先　〒一五三
東京都目黒区駒場2－19－23
大学入試センター研究部内
行動計量学会事務局　岩坪秀一

◇振替
番　号：東京八－一四八〇五六
加入者：日本行動計量学会

◇和文誌『行動計量学』
1巻1号　（八百円）
2巻1・2号（各七百円）
3巻1・2号（各千円）
4巻1号　（千五百円）
4巻2号、5巻1・2号
（各千七百円）
6巻1号　（千二百円）
6巻2号、および7・8・9・10・11巻の1・2号
（各二千円）

◇欧文誌"Behaviormetrika"
No.1～15　（各二千円）

◇送料
一冊　二百四十円
三冊まで　三百五十円

小グループ研究会・活動報告

社会調査技法研究会

本研究会は、発足以来、十七回の研究会合を行った。各回とも、研究代表鈴木達三先生の造詣の深い講義と、各種論文・資料の報告と討議がなされ、現在、基礎的文献研究から、実際行動へと進展しはじめたところである。以下にこの一年間の活動内容を一覧にする。（括弧は報告・討議された論文等）

第1回（83・6・10　参加17名）
調査にまつわる諸問題の検討
①調査誤差の論文・資料の発掘と一覧化　②サンプリング法、調査法の実施実態調査（含海外）
③質問バイアス発生の研究
最終目標……新調査手法の確立

第2回（83・7・8　参加17名）
「回収率の実態」「偽瞞調査行為の発生実態」「台帳なし抽出による実験調査結果」

第3回（83・8・5　参加11名）
「集落抽出法と無作為抽出法による結果の差異」「調査不能の要因」「世論調査の標本精度」

第4回（83・9・30　参加17名）
「協力依頼状の効果」「エリアサンプリングによる調査の試み」

第5回（83・10・21　参加15名）
「回収率実態調査二次分析」

第6回（83・11・14　参加11名）
活動方針を検討し、以下に決定。

第7回（83・12・9　参加10名）
「ＩＳＲ調査の抽出誤差の分析」「誤差」「米国の電話調査のサンプリング法」「サンプリング法・調査法実施実態調査のスキーム案」

第8回（84・1・13　参加10名）
「ギャラップ調査の抽出誤差分析」「標本調査の誤差種の一覧」

第9回（84・2・6　参加9名）
「世論調査はどこまで信用できるか」

第10回（84・3・9　参加11名）
「ノン・ランダム・サンプリング事例」

第11回（84・4・9　参加11名）
「ＩＮＲＡメンバーに行った調査票」「電話調査での世帯内個人抽出法」

第12回（84・5・10　参加7名）
「ＩＳＩブックレットレクエール掲載論文諸編」

第13回（84・6・7　参加7名）
実施実態調査の質問文検討及び実務作業の小グループ移管決定

第14回（84・7・12　参加7名）
各人分担の英文論文の翻訳と要旨の報告・討議

第15回（84・8・23　参加7名）
「ＩＳＲの電話調査」

第16回（84・9・27　参加6名）
鈴木先生帰朝報告「米国の社会調査の実態と動向」

第17回（84・10・5　参加15名）
研究会の活動経過の報告と今後の方針の確認

本年四月で会員の異動等があり参加が減少している。参加不能の方々及び学会員に対し、以上の報告を行うとともに、会員の方は何とか都合を調整して、再び参加されることを希望する。また、これからあらたに会員になりたい方々も大歓迎である。

本会の活動も佳境に入っており、基礎研究に並行して、いよいよ実験の実践段階となった。自治省で住民台帳の公開条項を見直す主旨の審議会がスタートしたという情報があり、サンプリングの危機が深まっている現在、我々の研究も急がねばならないと痛感している。学会員諸先生方の助力を、ここにお願いしておきたい。

（文責・柳原良造）

会報係からのお願い

★「会報」を会員相互の意思交流の場とするため、各方面の会員からの御投稿をお待ちしています。

★そのひとつが『**会員の声**』です。日頃、御自分の専門分野で研究を進める中で、行動計量学という学際的な視点からいろいろな思いや考えが頭をよぎると存じます。

そんなおりの感想、あるいは別の分野を専攻する会員への問題提起を、お気軽に御投稿ください。

分量は、たて書き15字づめで、60行から90行程度。題目、所属などを付記してください。

★**海外**における行動計量学の動向についても、会員の要望が強い情報だと思われます。国際学会や外国との共同研究についての情報、留学、出張の体験談など、新鮮な内容の御投稿を期待します。

★前号でもお願いした、**国内**の各種学会の大会や研究集会の日程、テーマ、話題などについての情報もよろしくお願いします。

★送付先はいずれも

〒115 東京都北区西が丘3－9－14
国立国語研究所内　杉戸清樹
（電話〇三－九〇〇－三一一一）